日本産科婦人科学会雑誌 ACTA OBST GYNAEC JPN Vol. 32, No. 1, pp. 6—10, 1980 (昭55, 1月)

産痛の神経支配に関する臨床研究

自治医科大学産科婦人科学教室(主任:玉田太朗教授)

安 部 直 利

Clinical Analysis of the Pain Pathways of Labor

Naotoshi Abe

Department of Obstetrics and Gynecology, School of Medicine, Jichi University, Tochigi (Director: Prof. Taroh Tamada)

概要 初産婦 11名に 高位分節硬膜外麻酔(Th_{12} - L_1)と低位腰部硬膜外麻酔(L_4 - L_5)の double catheter 法による麻酔分娩を行い,産痛の神経支配と子宮の知覚神経支配について臨床的に追求した.

硬麻針の穿刺角度及び皮膚—硬膜外腔までの垂直距離は Th_{12} - L_1 で $76^{\circ}\pm12^{\circ}$, 4 ± 0.5 cm, 又 L_4 - L_5 で $82^{\circ}\pm8^{\circ}$, 4.5 ± 0.5 cm であつた. 分娩第一期は Th_{12} - L_1 のカテーテルを用い,子宮口開大 4.6 ± 1.2 cm で麻酔を始め,0.5%マーカイン5ml を注入した. その後は産痛の出現を待つて同剤を5ml ずつ注入した. 初回注入時の局麻剤有効時間は 1 時間57分 ±34 分であつた. また,これにより得られた麻酔範囲は $Th_{9.4}$ - $L_{1.6}$ であつた. この麻酔で8cm 開大まで全例無痛であり,全開大まで無痛であつたもの7例(64%),8cm 開大以後有痛のもの4例(36%)であつた. ただしこの4例は児頭の下降が著しく,全開大前に腟,会陰部の圧迫伸展痛を $S_{2,3,4}$ の部位に訴えたものである.

 Th_{10} - L_1 の範囲の麻酔で第一期の産痛が除去できることから,この時期の産痛の知覚神経は Th_{10} - L_1 の範囲の後根に入ることになり,従来から我国で云われている仙髄性知覚神経の関与はあり得ないことが判明した。このことより,分娩第一期の産痛が主に子宮頚管開大と子宮収縮であることから,子宮頚部と子宮体部の知覚神経支配もまた Th_{10} - L_1 の範囲の後根に入り,仙髄性知覚神経支配はないことが推論される。

第二期の産痛は Th_{10} - L_1 と $S_{2,3,4}$ の範囲に認められ, L_4 - L_5 のカテーテルから0.25%マーカイン10ml を使用して全例無痛が得られた.

以上の結論として,1) 産痛の神経支配は,第一期 Th_{10} - L_1 ,第二期 Th_{10} - L_1 および $S_{2,3,4}$ であり,この範囲の麻酔で無痛分娩が可能である。2) 子宮の知覚神経支配は,子宮体部,子宮頚部共に Th_{10} - L_1 の範囲の後根に入り,仙髄とは無関係である.

Synopsis Segmental epidural blocks by double catheters which were inserted in the thoracolumbar (Th_{12} - L_1) and lower lumbar region (L_4 - L_5) were performed in eleven primiparas to investigate the correct pain pathways of labor and the sensory innervation of uterus. It is generally believed in Japan that the sensory nerves of the cervix of uterus enter the cord through the sacral segments ($S_{2,3,4}$) and the uterine body through the thoracic segments (Th_{11} , Th_{12}).

5 ml dose of 0.5% bupivacaine (Marcaine) was used to the upper catheter (Th_{12} - L_1) during the first stage of labor. Segmental spread of analgesia was on average $Th_{9.4}$ - $L_{1,6}$ and the duration was 1 hr 57 min \pm 34 min. Seven cases (64%) had no pain up to the full dilatation of cervix and four cases (36%) complained of the pain in the pudendal nerve region ($S_{2,3,4}$) at the 8 cm dilatation of cervix due to the lower engagement of the fetal head.

These findings suggest that not only the pain impulses during the first stage of labor which are resulted from the uterine contraction and the dilatation of the cervix enter the cord through $Th_{10}.Th_{11}.Th_{12}.L_1$ segments and have no relation to sacral segments but also the sensory nerves of uterine body and cervix enter clinically the cord through $Th_{10}.Th_{11}.Th_{12}.L_1$ segments and no relation to sacral nerves.

Key words: Labor pain • Uterus • Pain pathways • Epidural block • Bupivacaine

緒 言

無痛分娩の方向は世界的には全身麻酔から部分麻酔、特に硬膜外麻酔(硬麻)へと変わりつつあ

る. 我国においても硬麻を用いた分娩管理の報告 は今までに多数あるが、大部分が腰部硬麻や仙骨 麻酔を用いたものであり、高位分節麻酔と低位分 節麻酔を併用した double catheter (二本チューブ) 法に関するものや、高位分節麻酔のみの報告は少ない。

部分麻酔を用いて無痛分娩を確実に行うためには、産痛の神経支配に関する正しい知識が必要である。しかし従来から我国で信じられている理論の内、子宮頚部が仙髄性の副交感神経性知覚神経によつて支配されているという考え方は臨床的に多くの矛盾を含んでいて、部分麻酔をする上で障害となる。そこでこの点を再検討し、産痛除去の正しい方法を確立する目的でこの研究を行つた。

分娩第一期末期までを持続高位分節硬麻で,第 一期末期から第二期,第三期まではもう一本別の 持続腰部硬麻を併用して管理した。その結果 5ml の局麻剤による高位分節硬麻で分娩第一期の産痛 が完全に除去できることが判明したので,その麻 酔方法および産痛と子宮の知覚神経支配について 報告する.

研究方法

1. 対象

自治医科大学産科で分娩した初産婦11名で、いずれも麻酔分娩の適応¹⁾ のあつたものである. 妊娠週数は正常範囲で平均40週6日±6日、年齢は21歳から30歳、平均26.3歳、身長は142cm から162cm で平均155.9cm、体重は50.5kg から72.5

kg で平均61.2kg であつた (表1).

2. 麻酔法及び局所麻酔剤

double catheter 法による 持続硬膜外麻酔によった. (上) のカテーテルは Th_{12} - L_1 (第12胸椎と第1腰椎) の間で穿刺し,頭方へ 3cm 進めて固定した.これを分娩第一期に用い,局麻剤は 1回に0.5%マーカイン 5ml を注入し,痛みの出現を待つて 5ml ずつ追加した. (下) のカテーテルは L_4 - L_5 (第4腰椎と第5腰椎間)で穿刺し,頭方へ3cm 進めて固定した.これは(上)のカテーテルと共に分娩第一期末期から第二期,第三期にかけて用い,局麻剤は0.25%マーカイン10mlを使用した.

3. 分娩管理

分娩全経過をヒューレット・パッカード社製の 分娩監視装置 (cardiotachograph) を用いて、胎 児心音と子宮収縮を連続モニターした。子宮収縮 が弱い場合は必要に応じて、oxytocin 点滴を行つ て収縮増強をはかつた。

研究成績

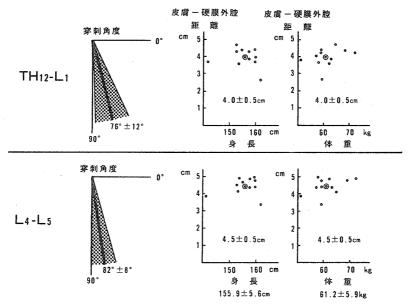
1. 硬膜外腔穿刺

(上)の Th_{12} - L_1 での穿刺角度は仙骨側の皮膚に対し $76^{\circ}\pm12^{\circ}$,皮膚から硬膜外腔までの穿入距離は 4.2 ± 0.7 cm で,垂直距離に直すと 4.0 ± 0.5 cm であつた.これに対し(下)の L_4 - L_5 のもの

表1 対象および研究結果

		A 1 1 1 1														
妊 婦	年齢	身長	体重	Th ₁₂ -L ₁ 穿入 穿入 垂直			L ₄ -L ₅ 穿入 穿入 垂直			硬麻 開始時 子宮口	麻酔範囲	局麻剤 有効	\$	硬麻開始	児体重	妊娠
	- 1	cm	kg	角度	距離	距離	角度	距離	距離	開大		時間	硬麻開始	児娩出		週数
Y. K.	24	160	68.5	61°	mm 50	mm 44	86°	mm 48	mm 48	cm	TT	分	時間分	時間分	g	週_日
1.11.	2.4	100	00.0	01	30	44	80	40	40	4	$T_{10}-L_1$	85	1 10	3 00	3440	41-5
Е. Н.	28	158	63	80	40	39	81	45	44	7	T ₉ -L ₂	120	2 00	4 30	3845	40-4
Y.S.	28	162	59	57	32	27	89	34	34	6	T ₁₀ -L ₁	115	18 52	1 55	3032	40-2
Y.O.	27	153	59	91	43	43	86	45	45	4	T ₁₀ -L ₂	60	8 10	4 15	3735	41-6
K. A.	30	153	64.5	57	56	47	80	42	41	6	T ₉ -L ₃	105	23 43	3 00	3508	40-5
K.K.	28	160	58	80	38	37	84	50	50	5	T ₉ -L ₂	190	14 49	9 20	3607	40-1
A.O.	27	160	57	85	40	40	89	44	44	4	T ₉ -L ₁	130	10 40	2 23	2900	39-0
H.N.	21	154	62	78	37	36	60	- 57	49	4	T ₁₀ -L ₁	105	10 00	3 51	3042	41-1
E.S.	28	158	72.5	77	44	43	81	. 50	49	4	T ₉ -L ₁	105	13 34	3 06	3323	41-2
К. Т.	23	155	59	85	44	44	86	48	48	3	T ₉ -L ₂	120	14 22	7.00	3000	41-4
M.S.	26	142	50.5	89	38	38	80	40	39	4	T ₉ -L ₂	150	17 13	6 34	2310	40-5
平 均	26.4	155.9	61.2	76.4	42.0	39.8	82.0	45.7	44.6	4.6	T _{9.4} -L _{1.6}	116.8	12 14	4 26	3249	40-6
標準偏差	2.7	5.6	5.9	12.4	6.6	5.5	8.0	5.7	5.0	1.2	- 9.4 - L-1.6	33.6	6 49	2 17	445	6

図1 硬膜外麻酔時の針の穿刺角度および皮膚--硬膜外腔距離と身長,体重との相関関係



は角度は82°±8°,穿入距離は 4.6 ± 0.6 cm で,垂直距離に直すと 4.5 ± 0.5 cm であつた.皮膚から硬膜外腔までの距離は Th_{12} - L_1 より L_4 - L_5 の方が平均して0.5cm 深い.

皮膚から硬膜外腔までの深さと、身長、体重との相関は特にみられなかつた(図1).

2. 麻酔開始時期

麻酔開始の時期は子宮口開大4.6±1.2cm の時であり、陣痛発来から麻酔開始までの時間は12時間14分±6時間49分、麻酔開始より児娩出までの時間は4時間26分±2時間17分であつた。

3. 局所麻酔剤有効時間

0.5%マーカイン5ml の初回注入時の有効時間は1時間 $57分±34分であり,非妊時の胸部における硬麻の有効時間<math>120\sim165分^{22}$ に比べてやや短いが,妊娠時の他のデーター1時間 $46分±5.8分^{26}$ とほぼ同じ結果である.

4. 麻酔範囲

(上) のチューブに0.5%マーカイン5ml を注入して得た麻酔範囲は Th_{10} - L_1 で、中には Th_9 - L_2 に拡がつたものもあつたが、平均すると $Th_{9.4}$ - $L_{1.6}$ であつた.

5. 麻酔効果

(上) のカテーテルによる Th_{10} - L_1 の麻酔範囲

で第1期の終りまで、即ち子宮口が全開大するまで無痛であつたもの7例(64%)、8cm 開大まで無痛であつたもの11例(100%)、8cm 開大以後有痛であつたもの4例(36%)であつた。この4例は児頭の下降が著しく、全開大前に腟、会陰部の圧迫痛を訴えたもので、この時点で陰部神経支配域の $S_{2,3,4}$ を麻酔するために(下)のカテーテルも併用した。

 Th_{10} - L_1 の範囲の麻酔で第 1 期の産痛が除去できるということは,この時期の産痛に関連した知覚神経は Th_{10} - L_1 の範囲の後根に入ることを示しており,従来から我国で云われている仙髄の関与は考えられない.一方,仙髄が関与する時期は第一期の末期から第二期にかけて児頭ないし先進部が腟や会陰部を圧迫伸展するようになつてからである.

6. 児体重

娩出した児 の 平均体重 は 3,250±450g であった.

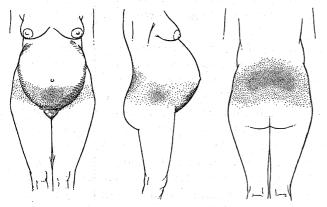
考 案

産痛の発生機序に関しては不明な点も多く残されているが、現在のところ分娩第一期の産痛は頚管の開大が主体をなすと考えられている^{16) 18) 19)25)} ²⁸⁾. これは人工妊娠中絶時の頚管拡張を無麻酔で

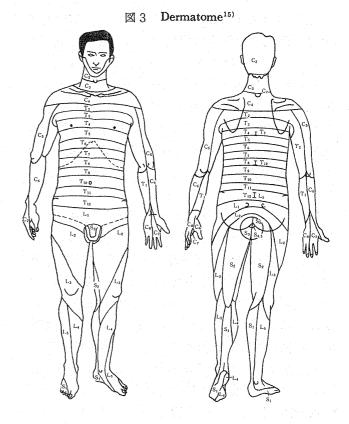
やった場合, 非常に強い痛みが下腹部から腰部にかけて走ることや, 産痛と頚管開大との間にかなり相関がみられる事実などからも充分推察できることである. この他, 痛みの原因として子宮下部の圧迫伸展¹⁶⁾¹⁸⁾や子宮筋そのものの収縮¹⁶⁾²⁹⁾も加わることが認められている. 一方, 第二期の痛みの主体は腟や会陰部の圧迫伸展であると考えられている¹⁷⁾²¹⁾²⁴⁾.

分娩第一期の産痛の神経支配は、前述した発生機序から考えて子宮の知覚神経支配を中心としたものとみてよいであろう。子宮の知覚神経については現在大別して二説ある。一つは、(A)子宮体部は11、12胸髄($Th_{11,12}$)、子宮頚部は 2、3、4 仙髄($S_{2,3,4}$)の後根に入るというもので Lull and Hingson²⁷⁾(1948)に代表され、もう一つは、(B)子宮は体部、頚部共に $Th_{11,12}$ の後根に入り、知覚神経に関する限り仙髄は関与していないというもので Cleland²³⁾(1933)に代表されるものである。

図2 分娩第一期の産痛の範囲20)



分娩第一期の産痛を臨床的に観察してみると図 2^{20} の如くで、その範囲は皮節(dermatome) 15 (図3)でみると Th_{10} - L_1 であり、仙髄の支配域である足底(S_1)、膝膕部(S_2)、会陰部($S_{2,3,4}$)、肛門部(S_5)には放散痛はみられない。もし子宮頚部の知覚が(A)説のように $S_{2,3,4}$ に支配されているなら、分娩第一期の産痛の主体が頚管の開大であり、しかも内臓痛は皮膚へ投射されるということから、仙髄の支配域に痛みが放散されていいはずであるが、実際にはそれが認められない。



産痛の神経支配を子宮の知覚神経と結びつけて具体的に発表したのは、我国では長谷川 3 (1952)、 $\mathbf{g}^{5)6}$ (1952, 1953)の両氏であり、いずれも Lull and Hingson (1948)の著書 2 7)を引用している。その説は (A) 説で、子宮体部の知覚は $\mathbf{f}_{11,12}$ の交感神経性知覚神経、子宮頚部の知覚は $\mathbf{f}_{2,3,4}$ の副交感神経性知覚神経に支配されていると主張している。この説は現在も我国で広く信じられて無痛分娩の基礎理論となつているが 2 3(4) 9 10) 11 12) 13 14(4),残念ながら 臨床的な 裏付けがなされてない。この中にあつて森 $^{7/8}$ 1 は子宮-内臓反射の動物実験から独自の理論を展開して、子宮の知覚は体部、頚部共 1 7 1 10- 1 12 (主に 1 1 1 1,112)と 1 2,3,4 に入ると述べ、Cleland の説を強く否定しているが、これも臨床的な裏付けに欠ける。

当研究の結果を検討してみると、すでに述べたように分娩第一期の産痛は Th_{10} - L_1 の範囲の神経ブロックで消失することが明らかになつた。このことから第一期の産痛は仙髄とは関係ないことになり、その上産痛の発生機序から考えて、子宮の知覚神経も体部、頚部共に仙髄とは無関係である

ことが証明されたことになる。ただ、子宮の知覚神経が体部、頚部共に Th_{10} - L_1 の範囲の後根へ入るとしても、 $Cleland^{23}$ の云うように $Th_{11,12}$ であるのか、 $Bonica^{21}$ や $Crawford^{24}$ が云うように $T_{10,11,12}$ L_1 であるのかは、 当研究の 結果からだけでは断定できない。しかし分娩第一期の産痛の皮膚への投射の状態から推測する限りでは、少なくとも 臨床的には Th_{10} - L_1 である 可能性 が大きい。

以上,高位分節硬麻を用いて産痛管理を行つた結果から,従来から我国で一般に信じられている産痛に関する神経支配,特に子宮の神経支配に関する理論が臨床的に誤りであることを指摘し,それに代るものを示した。新しい理論による無痛分娩は,第一期は Th_{10} - L_1 ,第二期は Th_{10} - L_1 及び S_{2-4} の範囲の麻酔を行うことにより可能である。もし児頭ないし先進部の下降が著しく,子宮口全開大前に腟,会陰部に疼痛を訴えるならば,その時点で第二期のための麻酔を始めればよい。

- 1. **安部直利**:分娩時麻酔 の 適応症. 麻酔, 20: 870, 1971.
- 2. 淵 勲:硬膜外麻酔の方法.産婦治療,36:77,1978.
- 3. 長谷川敏雄:無痛分娩法に就て.治療,34:264,1952.
- 4. **兵頭正義**:小麻酔学,改訂 5 版,279,金芳堂, 東京,1978.
- 5. **宮 信一**:無痛分娩について. 麻酔, 1:91, 1952.
- 6. **宮 信一**:無痛分娩に就て. 臨婦産, 7:718, 1953.
- 7. **森 巍**:産科麻酔と子宮神経支配. 周産期医学, 4:257, 1974.
- 8· 森 巍: 子宮神経支配 に 関 する い わ ゆる Cleland 仮説に対する疑義. 産婦の世界, 24: 1143, 1972.
- 9. **長内国臣**:産痛. 現代産科 婦人科学大系 14C (坂元正一ら編), 311, 中山書店, 東京, 1975.
- 10. **長内国臣**, **根本** 謙: 産痛と 麻酔. 産婦治療, 16:681, 1968.
- 11. **尾島信夫**:無痛分娩とその 管理法. 産婦治療, 16:422, 1968.

- 12. **高橋文子**: 旁頚管麻酔. 産科麻酔. (長内国臣 ら編), 22, 東京医学社, 東京, 1976.
- 13. 竹内繁喜:サドル 麻酔. 産婦治療, 16: 428, 1968.
- 14. **竹内繁喜**:サドル麻酔. 産科麻酔の手びき(安 井修平監修), 27, 克誠堂, 東京, 1972.
- 15. **若杉文吉**: 癌疼痛のくも膜下フェノールブロック療法. 臨床麻酔, 1:135, 1977.
- Abouleish, E.: In Pain control in obstetrics, 11.
 J.B. Lippincott Co., Philadelphia, 1977.
- 17. Abouleish, E.: In Pain control in obstetrics, 14. J.B. Lippincott Co., Philadelphia, 1977.
- 18. Albright, G.A.: In Anesthesia in obstetrics, 195. Addison-Wesley Publishing Co., California, 1978.
- 19. Bonica, J.J.: In Principles and practice of obstetric analgesia and anesthesia, 103. F.A. Davis Co., Philadelphia, 1967.
- 20. Bonica, J.J.: In Principles and practice of obstetric analgesia and anesthesia, 108. F.A. Davis Co., Philadelphia, 1967.
- 21. Bonica, J.J.: In Obstetric analgesia and anesthesia, 50. Springer-Verlay, Berlin, 1972.
- 22. Bromage, P.R.: A comparison of bupivacaine and tetracaine in epidural analgesia for surgery. Canad. Anaesth. Soc. J., 16: 37, 1967.
- 23. Cleland, J.G.P.: Paravertebral anesthesia in obstetrics. Surg. Gynecol. Obstet., 57: 51, 1933.
- 24. Crawford, J.S.: In Principles and practice of obstetric anesthesia, 4th ed. 64. Blackwell Scientific Publications, Oxford, 1978.
- 25. Javert, C.T. and Hardy, J.D.: Measurement of pain intensity in labor and its phisiologic, neurologic and pharmacologic implications. Amer. J. Obstet. Gynec., 60: 552, 1950.
- Littlewood, D.G., Scott, D.B., Wilson, J. and Covino, B.G.: Comparative anaesthestic properties of various local anaesthetic agents in extradural block for labour. Brit. J. Anaesth., 49: 75, 1977.
- 27. Lull, C.B. and Hingson, R.A.: In Control of pain in childbirth 3rd ed., 298. J.B. Lippincott Co., Philadelphia, 1948.
- 28. Moir, C.: The nature of the pain of labour. J. Obstet. Gynaec. Brit. Emp., 46: 409, 1939.
- 29. Woodbury, R.: Myometrial physiology and its relation to pelvic pain. J.A.M.A., 134: 1081, 1947.

(No. 4538 昭54·5·7受付)